戦前の関東圏における別荘の立地とその類型に関する研究

A STUDY ON THE DEVELOPMENT AND TYPES OF VILLAS IN JAPAN (1860'-1940')

十代田 朗*, 渡辺 貴介**, 安島 博幸***

Akira SOSHIRODA, Takasuke WATANABE and Hiroyuki YASUJIMA

This study tries to explain the development and types of villas in Japan (1860'-1940') for the period as the influence of the Western society.

For this purpose, historical records on each resort area, owner of villas, locations and plans of villas are analyzed.

This study revealed 1) the evolutionary process of villas in the Kanto region, 2) the factors which caused such development, and 3) the grouping of villa types in Japan (1860'-1940') on the base of the locations and the purposes of possession.

Keywords : villa, location, life style, concept

別荘, 立地, 生活様式, コンセプト

1. 研究の背景と目的

近年, 余暇時間の増大, 内需拡大の要請, 地域振興熱の高まりを背景に, 官民挙げてリゾートの整備構想が全国各地で掲げられており, 一大ブームとなっている。その反面, 環境破壊, 画一的な開発など各種の問題点も指摘され始めている。それらの開発プランの大部分は欧米の先進事例を範としているが, 気候風土, 国民性が異なるわが国でのリゾートのあり方を考えるうえでは, 西洋社会の影響を受けてリゾートがわが国に誕生したリゾートの黎明期に立ち返ってみることも必要であろう。そこで, その時代なりの豊かな階層の人々が希求したリゾート像をたどってみることによって, わが国のリゾートの原型のひとつを抽出することを試みた。

戦前のリゾートに関する研究としては, 湘南, 軽井沢といったあるひとつのリゾートに着目してその成立と展開の過程を論じた筆者らのグループによる一連の研究がある^{註1)}。しかし, これらは各リゾート間の影響関係や共通する背景を含めて論じてはおらず, 戦前におけるわが国のリゾートに関する全体的な変遷の様子やその社会・風俗的背景について全体像を描くには至っていない。

また, 戦前のリゾートの中心的構成要素であった別荘

に関しては, 近代建築史的な視点から論じた穴戸 實, 藤森照信, 河東義之らのグループによる一連の研究がある^{註2)}。これらは別荘建築の様式に関しては貴重な知見を得る研究であるが, 地形, 気候, 交通, 都市環境といった外的条件との関係, 別荘という特殊な用途に注目した使い方に関する検討を行っていない。

そこで, 本研究では,

① 明治期から戦前までの関東圏において, 別荘地はどのような場所に成立し, 展開したか。また, そのきっかけはどんなことであったか。

(ここでいう別荘地とは, 「ある程度の戸数の別荘が集積していた地域」とする。)

② 別荘を所有するにあたって, どのような社会・風俗的背景が存在したか。

③ それらを受けて, どのようなタイプの別荘が存在し, 立地, 使い方などにどのような特徴を持っていたか。

の以上の3点を明らかにすることを研究の目的とする。

2. 研究の構成と方法

まず, 関東圏全域に関する地方史・地誌などの新旧の文献を収集・分析することにより, 明治期から戦前まで関東圏における別荘地の成立とその後の展開(3章),

* 東京工業大学社会工学科 助手・工修

** 東京工業大学社会工学科 教授・工博

*** 金沢工業大学建築学科 教授・工博

Research Assoc., Dept. of Social Engineering Tokyo Institute of Technology, M. Eng.

Prof., Dept. of Social Engineering Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

Prof., Dept. of Architecture Kanazawa Institute of Technology, Dr. Eng.

と成立のきっかけを明らかにする(4章)。次に、それらから抽出した別荘地の成立・展開の社会・風俗的背景を、当時の世相を記した新聞記事、風俗・医学関連の新旧の文献を収集・分析することにより考察する(5章)。

それらをふまえて、立地、社会・風俗的背景の2つから別荘のタイプ分類を行い、さらに、①現地踏査、ヒアリング、新旧の地図、②別荘所有者の伝記・日記・自伝などを収集・分析することにより、その使い方など各タイプの特徴を明らかにする(6章)。

3. 明治期から戦前までの関東圏における別荘地の成立とその後の展開

明治初めから戦前までの間、関東圏の中で、別荘地がいつ、どのような場所に成立し展開していったのかを時代を追って考察する。

明治維新から明治20年頃までは、江戸期の延長で東京に下屋敷跡を中心として別邸が構えられただけであった。これは、関東圏全域に鉄道網が整備される以前の時代なので、時間あたりに到達できる距離が基本的には江戸期と変わらず、まだ非常に短かったことがひとつの要因と考えられる。

明治20年頃になると、同20年の東海道線の開通を始め急速に鉄道網が発達し、地方への到達性が飛躍的に向上したため、外国人、政府高官らの避暑願望、ステイタスシンボルへの欲求が表面化した。鉄道網に沿って、日光・箱根・江ノ島といった既存観光地とその周辺に次々と別荘地が成立した。この時代の主流は海浜部であり、明治45年に湘南では鎌倉だけでも400戸の別荘が立地していたが^{文1)}、それに対して、高原部では最も多かった軽井沢さえも200戸弱(193戸)であった^{文2)}。

第一次大戦後になると新たな別荘地の成立がみられ

る。新たな鉄道の延伸に沿って、電化など列車の性能アップによる到達時間の短縮もあって、高原部を中心に遠隔地に広がっていった。戦後、好況になって新しい富裕層が生まれたという需要サイドの条件と、箱根、軽井沢を中心に堤康次郎らによる開発分譲方式によって別荘が大量供給されたという供給サイドの条件によって別荘所有者の階層も広がっていった。この様子は各地の別荘所有者名簿などにみることができる^{註3)}。軽井沢の別荘数は昭和5年に819戸になっており^{文2)}、明治45年に比して4倍以上と急速に増加している。

このような箱根、軽井沢といった代表的な高原別荘地での所有者層の広がりに影響され、新たな2つのタイプの別荘地が生まれた。

ひとつは俗化した軽井沢を嫌った軽井沢の別荘所有者によって作られた別荘地で、宣教師による野尻湖「国際村」^{文3)}、学者による北軽井沢「法政大学村」^{文4)}がある。もうひとつは、軽井沢の繁栄に倣った別荘地で、倶楽部を作り、上流階級の人々を集めた妙高(新潟県)^{註4)}、富士見(長野県)^{註5)}、堤らに倣った分譲別荘地を中心に発展していった山中湖(山梨県)、那須(栃木県)がある。

以上の考察から、別荘地の分布は、明治20年頃と第一次大戦を境に2回大きく広がったといえる。そこで、明治維新から明治20年頃までの都市近郊にしか別荘地がみられない時代を第Ⅰ期、図-1の左側のような地域で別荘地の成立がみられる20年頃から第一次大戦まで時代を第Ⅱ期、その後、大戦後の図-1の右側のように新たな別荘地が成立する時代を第Ⅲ期として、この時代区分により以下の論を展開していく。

4. 各別荘地成立のきっかけ

各別荘地に関する文献を考察することによって、別荘

図-1 明治20年代後半と大正後期における鉄道網と別荘地の分布

図—2 明治 25 年における外国人別荘の分布 (文献 5) より作成

地が成立していくきっかけとして重要な役割を果たす事柄として、①外国人による別荘構築、②皇族による別荘構築、③リゾートホテルの開業、の 3 つが抽出された。

① 外国人による別荘構築

明治 25 年の外務省記録によると⁵⁾、明治 32 年の内地雑居制の実施以前は、外国人は土地家屋の所有を認められていなかったが、彼らは日本人の名義を借りて別荘を所有していた。外国人所有の別荘は、軽井沢の 22 戸を筆頭に、箱根、日光、湘南など、その後別荘地として発展していった地に多く存在していることがわかる (図—2)。外国人は仲間に周辺での別荘所有を薦め次第に集まって独自の別荘集落を形成していった。当時、外国人による観光目的の旅行は 'NUMBERED ROUTES' と呼ばれる 20 の決まったルートしか許可されていなかったため⁶⁾、そのルート上にある箱根、日光、軽井沢などが選ばれている。また、各居留地から十里までは外出が許可されていたため横浜居留地から十里内にある湘南には多くの別荘が構えられた⁷⁾。内地雑居制実施以後では、御殿場、野尻湖がこの成立タイプの別荘地である⁸⁾。

② 皇族による別荘構築

東京以外の地域の御用邸は、明治 30 年の時点で、日光、伊香保、箱根、葉山、熱海、沼津に構えられていたが (図—3)⁸⁾、箱根 (明治 19 年)、熱海 (同 21 年)、葉山 (同 27 年) などでの離宮、御用邸の建設は、政府高官など特権階級の人々の周辺への別荘構築を促進し、それらの地がわが国の代表的な別荘地として発展する最初のきっかけとなった。これらの御用邸の多くの適地選定には宮内省御用掛の医師であったドイツ人・E. ベルツが深くかかわっており、病弱だった皇太子 (大正天皇) の転地療養が主なる目的で西洋医学が導入されたものであ

図—3 明治 30 年における御用邸の分析 (文献 8) より作成

る (5-③詳述)。また、大正末期に建てられた富士五湖の梨本宮、妙高の久邇宮などの宮家の別邸構築⁸⁾も第Ⅲ期での新たな別荘地成立のきっかけとして大きく寄与したことがその地の地方史関連の文献から推察される。

③ リゾートホテルの開業

リゾートホテルは、日光の金谷ホテル (明治 6 年)、箱根の富士屋ホテル (同 11 年)、軽井沢の万平ホテル (同 27 年) など明治初めから外国人がしばしば訪れていた観光地に建設され⁹⁾、そこでは彼らによって西洋式のリゾートライフが行われており、リゾートホテルは日本人がリゾートライフを試行的に体験する場として機能し、そのことが周辺への西洋式のリゾートライフを楽しむ拠点としての別荘構築を促進したと思われる。

別荘地は、これらが単独で、あるいは組み合わせられて成立していったといえる。例えば、葉山は①、②、軽井沢は①、③、箱根は 3 つすべてが成立のきっかけである。

5. 別荘所有の社会・風俗的背景

別荘所有の社会・風俗的背景を各別荘地ごとに考察すると、①賓客接待 (伝統的交流、西洋的社交)、②避暑避寒、③療養保養 (温泉浴、海水浴、気候療法、日光浴)、④農場経営の 4 つの大きな社会・風俗的背景の流れが抽出される (表—1 の左側)。

① 賓客接待

平安貴族の京都山荘、大名の江戸下屋敷といった日本の伝統的な別荘形式を反映させつつ、明治に入り富を得た富裕階級によって継承されたものである。それは、多くの立地場所が下屋敷を踏襲したものであることなどからわかる¹⁰⁾。上流階級としての教養である茶・詩歌などの会を核にした交流が行われた。また、西洋的な社交も大きく関与し、西洋型の社交場の必要性を感じた政財

表—1 別荘のタイプと社会・風俗的背景の関連、およびタイプ別の特徴

社会・風俗的背景	別荘タイプ	所有者の職業	建物	使い方	滞在	代表例	別荘地
・賓客接待 ・避暑避寒 避暑 避寒 ・療養保養 温泉浴 海水浴 気候（大気） 日光浴 ・農場経営	都市内交流型	政財界指導者 皇族	和洋併設	接客 園遊会 風流生活	週1回程度	岩崎別荘 (三田) 山崎別荘 (京都)	東京23区内 京都
	高原避暑型	西洋上流日本人 外国志向人	洋館 バンガロ	避暑 学習 洋式生活	夏の長期滞在	シヨール別荘 (那須) 法政大学 (箱根)	軽井沢、日光、 野尻湖、御殿場、 富士五湖 etc. 箱根、妙高、 etc.
	温泉保養型	皇族 政財界人	和館中心	温泉 避暑（寒）	夏冬の長期滞在	御用邸 (熱海) 東伏見別荘 (箱根)	熱海
	海浜保養型	皇族 政財界人 実業家	和館と 洋館両方	海水浴 避暑 風流生活	夏冬の長期 週末利用 同居	伊藤別荘 (大磯) 西園寺別荘 (奥津)	湘南、房総、 沼津、興津
	農場経営拠点型	政財界 指導者	洋館 和館	欧州の 農牧 日本の 農耕生活	月1回 程度	青木農場 (那須) 乃木別荘 (那須)	那須
	郊外保養型	文化 上流日本人	和館中心	保養	週1回 程度	石橋別荘 (府中)	武蔵野

界人が、明治17年の鹿鳴館完成以前に構築した、欧米流の接客、招宴を行う場でもあった^{文10)、文11)}。

② 避暑避寒

転地して暑さ・寒さを避けるというもので、インドなどの植民地を経由して西洋人から明治に入って輸入された社会風俗である。日本の蒸し暑い夏に耐えられなくなった外国人が明治10年代に草津・伊香保といった既存の温泉地に盛んに避暑に行っていたという記録^{文12)、文13)}や、日本人が外国人に倣って遠くに避暑に行くようになったという新聞記事^{文8)}などからこのことが推察される。そのために隅田川などでの納涼船が不人気になったという記述も当時の風俗誌の文献にみられ^{文14)}、わが国の伝統的な避暑法に代わるほど流行したようである。

その後、徐々に日本人の間に広がったが、第Ⅱ期においては、当時盛んに出版されていた避暑案内などに挙げられている避暑地が既存温泉地や海水浴場がほとんどであることなどから^{文9)}。次に述べる各種の療養法との組み合わせで行われていたと思われる。

③ 療養保養

これが、日本人の別荘所有の重要な社会・風俗的背景となっていた。表—1に挙げられているものは皆、「転地療法」という西洋医学であるが^{文15)}、温泉浴、海水浴は日本古来の湯治の伝統に西洋医学を融合した形で普及していったものであることが当時の温泉浴、海水浴の入り方などからわかり、日本人には受け入れやすかったと推察できる^{文10)}。それに対して、気候療法は全くの輸入

療法であり^{文11)}、第Ⅱ期までは主に結核など呼吸器疾患の治療法で、これにより高原、海浜にサナトリウムが多く建てられた^{文12)}。日本人に広く意識されはじめたのは、東京市内の不衛生、汚れがクローズアップされ都市環境が問題となった第Ⅲ期からである^{文13)}。これが国木田独歩『武蔵野』（明治31年）に端を発した「武蔵野ブーム」につながり、気温の違うのないタイプの郊外別荘地を形成していくことが当時の武蔵野・東京郊外関連の文献などから読み取れる^{文14)}。この頃になると、病気の治療や健康維持のために紫外線を浴びる日光浴という療法も盛んになり始めた^{文15)}。

④ 農場経営

2つのパターンがあり、ひとつは西洋式の農場経営^{文16)}である。明治10年代に、政府の殖産興業政策に沿って、西欧式大農場を試みるために高原の官有地が華族ら民間に払い下げられ、大規模な開拓が行われ牧場や農場が生まれた^{文16)}。これら高原開拓地における別荘は、明治17年に西欧の貴族制度をもとにした華族令の公布によって爵位を得た明治の元勳達が貴族としてのステイタスを得るために、西洋貴族のようなライフスタイルを過ごす拠点として所有された。もうひとつは、いわゆる「帰農」の心情から生まれたもので、晴耕雨読の生活を営みたいという日本人の伝統的な思想である^{文17)}。

6. 立地と使い方からみた別荘のタイプとその特徴

3、5での考察を踏まえて、別荘の立地とその社会・風俗的背景からタイプを分類すると6つに分けられ、それ

ぞれ、a. 都市内交流型、b. 高原避暑型、c. 温泉保養型、d. 海浜保養型、e. 農場経営拠点型、f. 郊外保養型と名付ける。さらに、ここでは、各別荘地の所有者名簿、ヒアリングなどから別荘地ごとの代表的な別荘所有者をピックアップし、彼らの伝記・日記・自伝などを収集・分析することにより、「所有者の職業」、「建物の形態」、「使い方（別荘での活動内容）」、「滞在の形態」を明らかにする。それをまとめたものが表—1である。

a) 都市内交流型別荘

立地場所は、現在の東京 23 区内の隅田川、多摩川の川べり、東京湾を望む高台で、これらの多くは江戸時代の下屋敷跡である。

主に第Ⅰ期に、財界人によって構築され、代表例としては、深川の岩崎家別邸（明治 11 年）、王子飛鳥山の渋沢家別邸（同年）などが挙げられる。このタイプの別荘には和館と洋館が併設されていたという特徴がある。その使い方は、和館の方は、江戸期の大名の別荘ライフを踏襲して行われた伝統的な芸道である茶、詩歌などを嗜む交流の場として、J・コンドルなどの設計による洋館の方は、欧米の要人の接待など、欧米型の社交場として使われ盛んに園遊会が開かれていた^{文18)}。

また、関東圏ではないが、京都にも東山山麓を中心に、住友、野村といった関西の財界人に加えて、東京に本宅を置く政財界人の別荘も構えられた。代表例としては山県有朋の無隣庵がある。これらは明治以前からの京都の伝統的な別荘の系譜を継承しており、文化的な行事を核に、交流、接待、会合などに使われた。

b) 高原避暑型別荘

高原避暑型別荘が現れ始めた第Ⅱ期には、別荘所有者は、在日外国人が中心で新渡戸稲造など一部の西洋志向の強い人がいたに過ぎなかった。軽井沢における明治 44 年の日本人の別荘は 40 戸であったが、外国人の別荘は 135 戸に及んでいた^{文19)}。Ⅲ期になると 3 で述べたように日本人の上流階級が高原に押し寄せ、軽井沢に朝香宮、竹田宮^{文20)}、大隅重信、徳川慶久^{文21)}、箱根に閑院宮、東伏見宮^{文22)}、妙高の久邇宮、三井高公^{文22)}などといった宮家や政財界の指導者も多く別荘を構えるようになった。建物に関しては、外国人別荘は、軽井沢の「バンガロー」^{文23)}、野尻湖の「キャビン」^{文24)}のような簡易な建物であった。一方、日本人別荘は、細川家、徳川家の別荘など第Ⅲ期の軽井沢で人気を博した「あめりか屋」に代表される洋風建築が多かった^{文23)}。

その使い方は、当初は、避暑を主目的にしながらもこのような西洋式生活の模倣の舞台であり、テニス、ゴルフといった西洋から輸入されたばかりのスポーツ、外国人との各種パーティなど西洋式生活が積極的に行われていた^{文25)}。第Ⅲ期に入ってもこの傾向は続き、軽井沢以外の別荘地でも当時のハイカラな流行として西洋式リ

ゾートライフが展開されたことが、別荘所有者へのヒアリング、当時の写真などから明らかにされた。

例えば、大正初期の『赤倉温泉図絵』という墨絵には、「ハイカラな紳士達がテニスに興じ、乗馬に励み、玉突きに凝り、サイクリングをする」様子が描かれている。

これとは違うパターンとして北軽井沢の「法政大学村」^{文24)}・木崎湖の「学者村」^{文26)}といった別荘所有者の中心が学者で夏季大学も併設された学習・研究を主たる活動と銘打った別荘地が登場したことは注目される。この頃になると、軽井沢でも夏季大学が開設された^{文27)}。

c) 温泉保養型別荘

立地する地域は温泉資源が存在する所で、箱根、蓼科など高原部、熱海など海浜部の温泉地がある。

使い方の特徴は、高原避暑型の西洋式生活を取り入れようというスタイルとは違い、日本古来の伝統である湯治をしながら豊かな自然を相手に風流に過ごす純日本的なものであった。ここでは高原避暑型でみられたホテルなどでのパーティーを中心とした交流は少なく、別荘内における在宅接待が中心であったと思われる。軽井沢のようなコミュニティ施設・組織は存在しなかった。建物も、木々に囲まれた茅葺きの和風建築が多かった。現存する例としては、箱根宮ノ下の御用邸が挙げられる。滞在期間は、湯治のスタイルを受け継ぎ、2、3 週間の比較的長いものであった。

d) 海浜保養型別荘

別荘所有者は、海浜保養型別荘が現れ始めた第Ⅱ期には、皇族、宮家、政財界人の要人など特権階級に属する日本人全般にわたっていたが、高原避暑型に比べると外国人の割合は小さかった。前述の外務省記録によると明治 25 年に外国人は軽井沢に 22 人が別荘を所有していたのに対して鎌倉では 6 人に過ぎなかったことがわかる。

それに対して、日本人はⅡ期には高原部よりも海浜部に別荘を構えるものが多く、例えば、高原避暑型別荘を先駆的に所有した日本人として、桂太郎、岩崎弥之助がいるが、桂は明治 32 年には葉山に既に別荘を所有していたが軽井沢に所有したのは約 10 年後の 43 年であり^{文28)}、同様に岩崎も 23 年には大磯に既に所有していたが箱根に所有したのは 35 年である^{文29)}。

第Ⅱ期からⅢ期に至る継続的な特徴として、滞在パターンの変化が挙げられる。避暑のための夏期の長期滞在、避寒のための冬期の長期滞在という 2 シーズン制の利用が主流であった状況に、週末ごとに利用するスタイルが加わった。さらに定住利用もみられるようになった。これは、避寒にも適する温暖な気候と、湘南など比較的東京から近距離にある地域が多かったためである。これは使い方の変化ともかかわっており、長期滞在の際の主目的は、海水浴、避暑、避寒であったが（当時の療法としての海水浴は 2～3 週間にわたって行わないと効能が

表-2 原 敬の別荘利用日数と泊数

総利用日数: 1 2 3 日		泊数: 8 2 泊	
1泊2日	2泊3日	3泊4日	4泊5日
7回	30回	2回	1回

(大正9年7月11日より同10年10月25日までの471日間)

図-4 原 敬の曜日別別荘滞在率

図-5 原 敬の季節別滞在日数(季節別滞在日数は大正9年7月~同10年6月をカウント)

ないとされていた), 週末利用の際の目的は, 保養を目的としたものに会合や接客が加わるようになった。例えば, 週末ごとに腰越(鎌倉)の別荘を訪れていた原敬^{文30)}, 大磯で政治の行方を決める重要な会議を度々開いていた伊藤博文^{文31)}がいる。原 敬の別荘利用状況を「原敬日記」より分析してみると, 原 敬は土曜日の夕方に仕事を終え腰越に行き, 2泊して月曜の朝に東京に帰るというパターンがほとんどであった。その別荘は週末の休養または賓客接待に当てられ, 気候のよい4月~7月はほとんどの週末に利用されていたことがわかる。

また, 定住した例としては, 隠居の地として選ぶ場合が多く, 大磯に本籍を移した伊藤博文の「滄浪閣」, 古希を迎え小田原に山県有朋が構えた「古希庵」^{文32)}, 西園寺公望が晩年には一年の四分之三を過ごした興津(静岡)の「坐漁荘」^{文33)}が挙げられる。

e) 農場経営拠点型別荘

農場経営の社会・風俗的背景の2つのパターンに従って, 西洋式農場経営の拠点型(e-1)と, 日本式農耕生活の拠点型(e-2)の大きく2つのタイプに分かれる。

建物に関しては, e-1型は地方に設けた農場とそれに付帯する洋館, e-2型は農家風の和館が多かった。代表例としては, e-1型には那須に広がる山県有朋, 松方正義, 青木周蔵, 西郷従道, 大山巖ら, 軽井沢の雨宮敬次郎, 岩手の岩崎家(現, 小岩井農場)の農場があり, e-2型には那須の乃木将軍, 東京府中の東郷元帥の農場がある。これらの使い方の主目的は避暑ではなく農場経営であると思われる。このことはこれらの立地場所から推察される。e-1型が多く立地する那須では農場別荘群は代表的な高原避暑型別荘の一つである那須御用邸に比べると避暑に最適とはいえない標高の低い所に立地していること(那須御用邸: 標高700mに対して, 山県邸: 標高380m, 松方邸: 330m, 青木邸400m), また, e-2型は気候の変化がない府中を中心にした東京郊外にも多く立地していることである。別荘所有者は, e-1型は明治維新の功勞者である新華族, e-2型は軍人が多い点に特徴がある。滞在パターンは, e-1型では夏期を中心に年に数回訪れるのが基本的であるが^{文32), 文34)}, 乃木は休職などの時は那須に長期滞在して, 質素な農耕生活を行ったとその伝記には記されている^{文35)}。

f) 郊外保養型別荘

Ⅲ期になって表れる別荘のタイプで, 最大の特徴は, 保養を主目的としながらも気温の変化を求める避暑避寒が関与しない点である。立地場所は独歩が『武蔵野』の中で記した武蔵野の範囲内にある^{文36)}。建物は和館がほとんどであったが, 武蔵野のなかでもどのような場所が選ばれていたかという点, 多摩川沿いの富士山がよく見える地に多く立地していた。独歩の『武蔵野』はそれまでの日本人の風景観を大きく変えたといわれているが, 別荘の立地がその風景観とよく一致していることは, 「また多摩川は, どうしても武蔵野の範囲に入れなければならぬ。」や「…殊に富士で分明る。富士を高く見せてあだかも我々が逗子の“あぶずり”で眺めむるように見えるのはこの辺に限る。」などの記述からもわかる。

滞在パターンは主に日帰りでしたしばしば利用されており, その使い方としては, ゴルフ, 釣り, イモ掘りなどの自然の中で遊ぶレクリエーションが行われていたことが別荘の元所有者へのヒアリングなどからわかった^{註17)}。現存する例としては, 松方家の玉川別邸, 石橋正二郎の府中鳩林荘がある。

7. 結 論

本論文で明らかにした結論は以下の3点である。

(1) 戦前の関東圏における別荘地の成立と展開は, その分布などから,

Ⅰ期…江戸期の下屋敷スタイルの継承期で, 都市内に立地していた。

Ⅱ期…西洋の社会風俗の導入期で, 気候風土の異なる

地域への立地が始まり、海浜部を中心に展開していた。

Ⅲ期…所有者層の拡大と避暑の浸透期で、高原を中心に展開していた。

の三期に分けられる。また、別荘地形成のきっかけとして、①外国人による別荘構築、②皇族による別荘構築、③リゾートホテルの開業、の3つがあった。

(2) 別荘を所有するにあたっての社会・風俗的背景には、日本古来の「賓客接待」、西洋から輸入された「避暑・避寒」、「大気療法」、日本古来のものと西洋から輸入されたものの融合である「温泉浴」、「海水浴」、「農場経営」があった。なかでも療養・保養が、日本人による別荘地の成立と展開には大きな影響を与えていた。

(3) 戦前に存在した別荘のタイプには、立地と使い方を中心に分類すると、「都市内交流型」、「高原避暑型」、「温泉保養型」、「海浜保養型」、「農場経営拠点型」、「郊外保養型」の6つが存在した。

本論文に関連のある既発表論文

- a) 十代田朗ほか2名：明治・大正期における湘南および房総地域の臨海部別荘地の成立過程，日本都市計画学会学術研究論文集，第20号，pp.331～336，昭和60年
- b) 安島博幸ほか2名：明治期の別荘の立地と様式に関する研究，日本観光研究者連合研究発表論文集，No.1，pp.53～58，昭和61年
- c) 西村 真ほか2名：わが国近代高原リゾートの成立と展開，日本都市計画学会学術研究論文集，第22号，pp.61～66，昭和62年
- d) 武井裕之ほか3名：戦前の東京における別荘・別邸の立地とその成立背景に関する研究，日本建築学会学術講演梗概集F，pp.319～320，昭和62年
- e) 西澤倫太郎ほか3名：野尻湖における外国人別荘地「神山国際村」の成立と展開，観光研究，Vol.3/No.1・2合併号，pp.1～8，平成2年
- f) 勝又宏幸ほか1名：戦前の御殿場における高原リゾートの成立と展開，日本都市計画学会学術研究論文集，第25号，pp.319～324，平成2年

注

- 1) 論文a), c), d), e), f) がある。
- 2) 「東京建築探偵団：近代建築ガイドブック [関東編，鹿島出版界，昭和57年]，「穴戸 實：軽井沢別荘史，住まいの図書出版局，昭和62年」などがある。
- 3) 例えば，葉山では，明治年代には，皇族3人，政治家9人，実業家1人，学者4人，軍人2人(文献ア)による)であったが，昭和2年には，皇族4人，政治家5人，実業家55人，学者23人，軍人1人(文献イ)による)と所有者層が変化している。
- 4) 田代達雄氏(赤倉温泉郷土史家)へのヒアリングより。
- 5) 大正9年7月26日の『朝日新聞』に「高原の避暑地として軽井沢が，近年ますます俗化するため，信州の富士見が都会人に認められてきた」と記されている。
- 6) 論文e), f) に詳しい。

- 7) 例えば，岩崎家の別邸「清澄園」は松平家などの，「六義園」は柳澤吉保の下屋敷跡である。
- 8) 例えば，東京朝日新聞：明治25年8月20日付には，「外国人を見習って避暑旅行を始めるようになり，今日では，避暑をしなくては紳士ではないかのように思われるようになった」というようなことが記されている。
- 9) 「読売新聞：明治26年7月5日付掲載の『避暑地案内』，「風俗画報368号(明治40年7月)の『避暑地案内』，「日本新聞社による明治41年7月16日付の『日本一避暑地投票』」などにこの傾向がみられる。
- 10) 論文a) に詳しい。
- 11) 文献15) にも「古来本邦に於て特に之を唱道するものあらざりし……」と記されている。
- 12) 高原では明治10年の箱根(文献ウ))，海浜では同19年の鎌倉(文献エ))をはじめとして次々と建てられた。
- 13) 文献オ)によると，大正後期には，新中間層の母親に「空気をやかましく云ふ」習慣が成立するなど，都市環境への関心の高まりから「オゾン」という言葉が広まった。
- 14) 武蔵野関連の文献としては，「並木仙太郎：武蔵野，民友社，大正2年」，「田村剛編：武蔵野，科学主義工業社，昭和16年」，「大岡昇平：武蔵野夫人，新潮社，昭和28年」などがある。東京郊外に別荘を構えることを薦める文献としては，保谷・石神井などを理想的新別荘地として投票で選定した「中柄正一：郊外住宅と新別荘地，至誠堂，大正5年」があるが，国立，桜新町といった郊外住宅地分譲の売り出し広告にも別荘地としても適しているという記述がみられる。
- 15) 日光浴に関する啓蒙書として，「文明協会：日光と健康，昭和4年」，「正木俊二：総合日光療法，三光書院，昭和5年」，「三戸時雄：日光浴と空気浴，診断と治療社，昭和5年」などが次々と出版された。
- 16) 米国製大型農業機械を導入した数百ヘクタール単位の大規模経営や，羊や乳牛の飼育による羊毛や乳製品の製造を行う。
- 17) 森村登代子氏など。

参考文献

- 1) 大橋左狂：現在の鎌倉，pp.44～45，明治45年
- 2) 島崎 清：軽井沢百年の歩み，p.40，昭和53年
- 3) 信濃町編：信濃町誌，pp.1116～1120，昭和43年
- 4) 北軽井沢大学村組合：大学村五十年誌，pp.13～20，昭和55年
- 5) 外務省記録：外国人ニシテ日本人名義ヲ以ッテ土地又ハ家屋ヲ所有スルモノノ調査，明治25年
- 6) Tourist's guide and interpreter, 1891
- 7) Ernest Mason Satow C.M.G., Lieutenant A.G.S. Hawes: A handbook for travellers in central and northern Japan, 1884
- 8) 井原頼明：増補皇室辞典，富山房，pp.139～141，昭和17年
- 9) 村岡 實：日本のホテル小史，中央公論社，p.79，p.99，p.134，昭和56年
- 10) 渋沢青淵記念財団竜門社編：渋沢栄一伝記資料別巻第十，p.266，昭和46年
- 11) 岩崎家傳記刊行会編：岩崎久弥傳，東京大学出版会，pp.290～292，昭和32年

- 12) 萩原 進：草津温泉史，文進社，p. 60，昭和 23 年
- 13) 伊香保町教育委員会編：伊香保誌，伊香保町役場，p. 137，昭和 45 年
- 14) 平出鏗二郎：東京風俗誌一中の巻一富山房，p. 47，明治 34 年
- 15) 長尾折三：日本轉地療養誌，吐鳳堂書店，pp. 1～2，明治 43 年
- 16) 磯 忍：那須野ヶ原開拓のあらまし（改訂版），pp. 14～16，昭和 50 年
- 17) 藤森照信：那須野ヶ原プランテーション別荘群，NIK-KEI ARCHITECTURE 1 月 27 日号，pp. 128～135，昭和 61 年
- 18) 平出鏗二郎：東京風俗誌一下の巻一富山房，pp. 110～112，明治 34 年
- 19) 文献 2)，p. 39
- 20) 朝吹登水子編：わが心の軽井沢，軽井沢を語る会，p. 35，昭和 61 年
- 21) 文献 2)，P. 44
- 22) 渡辺慶一：赤倉温泉沿革史，赤倉温泉組合，p. 87，昭和 30 年
- 23) 穴戸 實：洋風別荘地帯，SPACE MODULATOR，No. 60，日本板硝子 KK，pp. 16～23，昭和 57 年
- 24) 論文 e)，p. 6
- 25) 朝吹登水子：私の軽井沢物語，文化出版局，昭和 60 年
- 26) 大町市史編纂委員会編：大町市史，第五巻，pp. 856～857，昭和 59 年
- 27) 文献 2)，p. 48
- 28) 徳富猪一郎：公爵桂太郎傳，故桂公爵記念事業会，pp. 979～987，大正 6 年
- 29) 岩崎家傳記刊行会編：岩崎弥之助傳，東京大学出版会，pp. 451～461，昭和 32 年
- 30) 原奎一郎編：原敬日記第 9 巻首相時代篇下，乾元社，昭和 25 年
- 31) 朝日新聞横浜支局編：残照神奈川の近代建築，p. 80，昭和 57 年
- 32) 徳富猪一郎：公爵山県有朋傳，山県有朋公記念事業会，p. 1138，昭和 8 年
- 33) 安藤徳器：陶庵公影譜，審美書院，p. 101，昭和 12 年
- 34) 徳富猪一郎：公爵松方正義傳，公爵松方正義傳記編纂会，pp. 1165～1176，昭和 10 年
- 35) 日本歴史学会編：乃木希典，吉川弘文館，昭和 35 年
- 36) 国木田独歩：武蔵野，新潮社，pp. 24～26，昭和 24 年
- ア) 郷土誌編纂委員会編：葉山町郷土誌，pp. 94～95，昭和 50 年
- イ) 葉山小学校編：葉山郷土誌，p. 42，昭和 5 年
- ウ) 箱根町教育委員会：箱根近代百年史年表，箱根町，昭和 43 年
- エ) 鎌倉市市民相談部広報課：愛されて 100 年 鎌倉海水浴場，鎌倉市役所，p. 6，昭和 59 年
- オ) 原田勝正：汽車・電車の社会史，講談社，pp. 173～174，昭和 58 年

（1991 年 7 月 31 日原稿受理，1992 年 4 月 8 日採用決定）